



岩手県立大学 看護学部 基礎看護学講座の紹介

Iwate Prefectural University



基礎看護学とは…

基礎看護学（Fundamental Nursing）とは、看護について専門的に考え学ぶ第1歩となる、看護教育の基盤となる領域です。基礎看護学講座では、根拠に基づいた看護教育を目指し、看護の基盤となる基礎的な知識・技術・態度について追究しながら日々の教育研究活動に取り組んでいます。
理論看護学、**看護技術学**、**心身機構学**の3つの研究分野から成り立ち、現在9名の教員がいます。



教育活動について

教育活動では、多くが1・2年次の専門科目を担当することから、3つの教育研究分野が連動しながら各臨床看護学領域の基盤となる素養の涵養を目指しています。



演習授業の様子

理論看護学

看護の対象や人間の健康、看護の歴史、専門職としての看護職者の役割などについて教授します。

看護技術学

対象者に共通し基本・基礎となる食事援助のような生活援助技術と注射のような治療援助技術について教授します。

心身機構学

人体の形態と機能、病因・病態、生体の防御機能などからだの仕組みと病気について教授します。

この3つの分野が連動しながら教育研究活動を行っています

研究活動について

地域に根ざし地域に貢献する研究活動

東日本大震災の被災者への健康支援として、地域のボランティア活動団体と協力し、継続的に健康相談や健康指導を行っています。また、現場で働く看護職の方に看護技術に関する研修会を開催し支援しています。

看護基礎教育の充実を目指す研究活動

基礎看護学実習の前に、地域ボランティアの方々を活用した模擬患者演習授業を行っています。とても貴重な学習機会になっています。



基礎看護学実習前の模擬患者演習

看護技術の科学的根拠を探究する研究活動

注射や薬剤の傷害など現場で起こる看護技術の疑問や課題について、基礎的実験を行い検証し、科学的根拠を追究しています。



実験室ラボで卒業研究に取り組む

基礎看護学講座で卒業研究に取り組んだ卒業生たちが、学会で発表したり、本学の大学院に進学したり、臨床現場で指導者となったり、教員として大学に戻って来て学び続けています。

「基礎看護学」は、看護学の基盤となる領域ですが「初心忘るべからず」「初心にかえる」などの言葉があるように、いつの時期においても立ち止まり振りかえる際の基点になる領域です。

看護は、一生かけて学び続けていく職業です。

多くの方との出会いから、私たち教員も日々学ばせていただいています。



= 基礎看護学講座の研究活動について =

基礎看護学実習前に実施した教員の模擬患者による対話型シミュレーション演習の教育効果

○鈴木美代子, 高橋有里, 井上都之, 三浦奈都子, 藤澤望, 小向敦子, 及川陽子

- 基礎看護学講座では、看護学部1年次の基礎看護学実習前の学内演習として、教員が模擬患者となり対話を重視した「対話型シミュレーション演習」を実施している。
- 演習後の学生アンケートよりその教育効果について、主体的学修への取り組み、知識・技術についての理解度、実習での実践への有益性の観点から評価を行った。
- 教育効果が高い傾向が示されたのは、有益性に関する項目で、低い傾向にあったのは経験と結びついた理解度に関する項目であった。その理由として、【実際の臨床現場をふまえた具体的なポイント】【良い点・改善点を見つけ自分のケアに生かす】など、現場を知る教員からのフィードバックやグループ学生の観察の有効性が示された一方で、【理解の不十分さや緊張感・難しさを実感】【知識習得の必要性を実感】が抽出され、実習に向けて学生が実感した不足や課題に対するサポートの必要性が示唆された。

表1. 教員間で共有した場面毎のシナリオと学び・フィードバックのポイントの一部

場面	ポイント	フィードバック
学生① 学 生: バイタルサインを測定し、指導者役の学生にアセスメントと共に報告する。 患 者: 右手は疼痛を訴え、自力では動かない。	<input type="checkbox"/> 右手の疼痛に配慮できたか <input type="checkbox"/> 適切な手技で行えたか <input type="checkbox"/> 患者の不安などはどうか	手技、身体状態(疼痛、聴聴)への配慮について述べる。
学生② 学 生: バイタルサインを測定し、指導者役の学生にアセスメントと共に報告する。 患 者: バイタルサインを測定し、指導者役の学生にアセスメントと共に報告する。 ※実際に測定しなくても可とする 患 者: ぐっすり眠っており、声を掛けられたら「夜眠れなくて、今より早く眠ったところなの〜もう少し眠かせて頂戴」と答え、布団を被る。	<input type="checkbox"/> バイタル測定の実行の必要性を説明し同意を得られるか <input type="checkbox"/> 「眠っていて頂いたままで良いので〜」など患者に配慮した声かけができるか <input type="checkbox"/> 不眠の理由を確認できるか	患者の要望に配慮しながら、バイタル測定を行う必要性について述べる。患者の訴え(不眠)の背景を探る必要性について述べる。

【場面1】(35分)
(挨拶と環境整備)

実習初日を想定し、看護学生として、受け持ち患者に自己紹介と挨拶および環境整備を行う。

【目標】
 受け持ち患者へ看護学生としてふさわしい挨拶(自己紹介)ができる。
 患者の療養環境を観視し、安全・安楽に配慮した環境整備が行える。

【場面2】(52分)
(バイタルサイン測定と情報収集、その結果の報告)

バイタルサイン測定と必要な情報収集を行い、測定結果とアセスメントしたことを指導者へ報告する。

【目標】
 受け持ち患者のバイタルサインを正確に測定し情報を得ることができる。
 関連する必要な情報を考え、ベッドサイドで得ることができる。
 得られた情報をもとに患者の状態をアセスメントして指導者へ報告することができる。

【場面3】(78分)
(患者の反応や状態に応じたバイタルサイン測定と情報収集、結果の報告)

患者の反応や状態に応じてバイタルサイン測定と情報収集を行い、測定結果とアセスメントしたことを指導者へ報告する。

【目標】
 受け持ち患者のバイタルサインを正確に測定し情報を得ることができる。
 患者の反応や状態に応じて必要な情報を考え、ベッドサイドで得ることができる。
 得られた情報をもとに、患者の状態を根拠に基づいてアセスメントして、指導者へ報告することができる。

【場面4】(60分)
(清潔ケアの計画調整と実施方法の相談・選択)

患者の清潔ケアについて指導者と調整する。その後、計画した清潔ケアについて患者へ説明を行い同意を得る。

【目標】
 受け持ち患者の清潔ケアについて、計画した内容を指導者に的確に相談できる。
 患者に説明を行い、事前の身体状態について確認することができる。
 情報をもとに適切なケアの方法を考え、指導者へ報告・連絡・相談を行える。

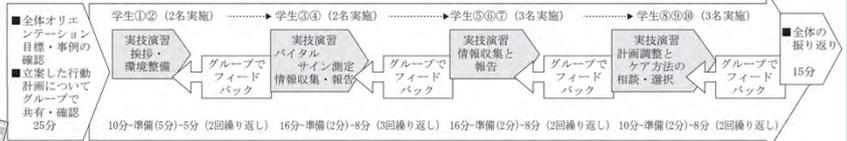


図1. 対話型シミュレーション演習のプログラム概要

模擬患者 (SP: Simulated Patients) とは

模擬患者とは、医療者(学生)の教育のために一定のトレーニングを受けて患者役を演じる人を言います。1964年にアメリカの医学教育で始まり、日本では日野原重明先生がその必要性を唱え、1992年から医学教育分野で導入されるようになりました。看護教育分野では2000年以降急速に導入されるようになっていきます。

出典: 岩手看護学会誌 vo.17, No.2, 2023

学生の基礎看護技術修得に向けた授業時間外における支援 —看護援助技術オフィスアワー設置の効果—

○藤澤望, 高橋有里, 鈴木美代子, 井上都之, 三浦奈都子, 及川正広, 小向敦子, 及川陽子, 松原綾奈

- 基礎看護学講座では、学生が主体的に看護技術を修得できる学修環境の整備が必要と考えている。その取り組みの一つとして2021年度より、授業時間外に教員が実習室に待機し、技術修得支援を行う「看護援助技術オフィスアワー」を設置している。
- 学生への技術修得の効果を明らかにし、今後のオフィスアワーの在り方について検討することを目的に調査を行った。
- 1~4年生のオフィスアワーの利用表と、そのうちアンケート調査に協力された221名の回答を分析した。その結果、学生にとってオフィスアワーで教員から指導を受けられることは、補充学習として効果があることが分かり、教員が実習室に待機し、学生のニーズに合わせて丁寧にかかわることは、学生の技術修得のモチベーションの向上と主体性をもった学習行動の促進につながることが考えられた。また、学年毎でオフィスアワーに対するニーズが異なることが明らかになり、今後は学年に合わせた支援方法について検討していく必要性が示唆された。

表1. オフィスアワーで学生が実施した看護技術内容一覧 (延べ回数)

選択項目	1年生	2年生	3年生	4年生
バイタルサイン測定	261回	10	2	3
ベッドメイキング	3	7	3	—
移乗・移送	36回	—	—	41回
更衣	—	—	—	25回
床清掃	97回	—	—	—
持続吸引	—	—	—	3
口腔・鼻腔内吸引	—	—	—	40回
包帯法	—	4回	1	—
薬液の準備	—	89回	4	2
輸液管理	—	—	—	41回
静脈注射	—	57回	4	32回
技術的テスト	2	—	—	—
指導者への報告練習	1	—	—	—

※…技術テストや課題の対象であった看護技術

表2. 利用したことがある学生の「利用したことで良かったと思う」理由

カテゴリー	1年生	2年生	3年生	4年生
【技術の不安・疑問が解消した】	●	●	●	●
【技術に対して自信がついた】	●	●	●	●
【教員とコミュニケーションをとることができた】	●	●	●	●
【自分では気づけなかった間違いに気づくことができた】	●	●	●	●
【教員と気軽に手技の確認ができた】	●	●	●	●
【技術テストや課題に役立った】	●	●	●	●
【個別性のある指導を受けられた】	●	●	●	●
【技術の練習回数が増えた】	●	●	●	●
【勉強を理解し、自己学習に工夫を加えることができた】	●	●	●	●
【実習に役立った】	●	●	●	●
【授業で分らなかった点を確認できた】	●	●	●	●
【より多くの知識を得ることができた】	●	●	●	●
【自分の技術の修得状況を把握できた】	●	●	●	●
【臨床に対して意識が変わった】	●	●	●	●
【物品を練習しやすいように調整してくれた】	●	●	●	●

出典: 岩手県立大学看護学部紀要 26, 2024
岩手県立大学 看護学部 基礎看護学講座

= 基礎看護学講座の地域貢献について =



県内看護職・福祉職の看護技術ブラッシュアップ支援

- ・基礎看護学講座では、平成23年度より、岩手県内の看護職者や福祉職を対象とした「看護技術に関する支援事業」を継続的に開催しています。
- ・この事業では、看護技術に関する多様な研修会を企画し、看護職者が現場で日々実践している看護技術に関する知識のリフレッシュや技術のブラッシュアップのための支援を行っています。
- ・参加者同士がケアに関する疑問点や困難点を共有できる場を提供し、研修を通して、問題を解決するための力を身につけ、エビデンスに基づいた看護技術を実践していただけるよう支援しています。
- ・また、最新の知識を伝えるだけでなく、その知識をもとにした演習を多く取り入れることで、研修会での学びを看護実践につなげられるよう工夫しています。
- ・研修テーマ／内容／開催場所は、研修会終了後アンケートに寄せられた意見をもとに検討し、現場のニーズに応じた質の高い研修会となることを目指しています。

研修会の様子



▼研修会参加者のアンケート結果(自由記載項目から一部抜粋)
 「基本的な部分からかなり詳しく学ぶことができた」「復習・再確認としての意味がとてもあった」
 「実践もでき、理解が深まった」「今後の看護に活かせると思った」「実践にすぐに活かそう」等
 ⇒本事業は、岩手県内の看護職者が新たな知識を得る機会となっており、日頃の疑問や課題を解決するための場として活用されていると評価できる。今後も現場のニーズに応じて企画・開催していく。



東日本大震災被災者の健康支援



健康相談の様子



震災への想いを込めて
看護学部の教員有志で
復興ぞうきんの手縫いに
チャレンジしました!



復興ぞうきん展の様子



- ・基礎看護学講座では、東日本大震災発災翌年の平成24年より被災者の方々への健康支援を継続して行っています。
- ・沿岸から盛岡のみなし仮設に避難した被災者を支援している「SAVE IWATE」のボランティアの方々と協働し、医療職の立場からの支援を行っています。
- ・SAVE IWATEの活動の一つである「復興ぞうきんプロジェクト紡ぎ組」は、被災者の方々が寄付のタオルや手ぬぐいから作ったぞうきんを持ち寄り、お茶を飲みながら語らう場です。
- ・私たちはその場にお邪魔して、希望するの方々に対して、血圧、脈拍、経皮的動脈血酸素飽和度の測定や自覚症状をうかがい、健康維持のための助言をしたり、心配なことや大変なこと等のお話を傾聴したりしています。
- ・震災前から多くの方が慢性疾患の既往があったことに加え、震災から10年以上経過して高齢化が進み、身体症状の増加や、会話の様子から認知機能の低下も心配されます。さらに、近親者の逝去など環境の変化に伴う心身の不調を訴える方もあり、未永い支援の必要性を感じています。